

バス運転中あいさつ危険

運転手調査、なお半数で確認

路線バスの運転手が自社の車両と擦れ合う際、手を上げてあいさつする。前不注意の恐れがあるとして業界団体は長年禁止している行為だが、9都府県で実施した覆面調査の結果、約半数の運転手で確認された。

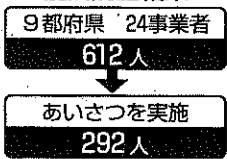
依然として横行する姿態に、専門家は一瞬見や片手運転の原因になる。国や事業者は指導を徹底すべきだと警告している。

調査は2021年に北九州市で発生したバスと自転車の死亡事故に絡み、バスやトラックが起因とした事故の原因を調べる事業用自動車事故調査委員会が実施。委託を受けた交通事故総合分析センター(東京)の職員数十人が22年8月23日、24日、25日と3日間帯同の場所へバスに乗り、運転手の動きを10〜15分ほど観察した。

その結果、24事業者の計612人のうち、擦れ合う際に手を上げたり、挨拶に手を合わせたりなどをしたのは292人で、全体の47.7%に達した。

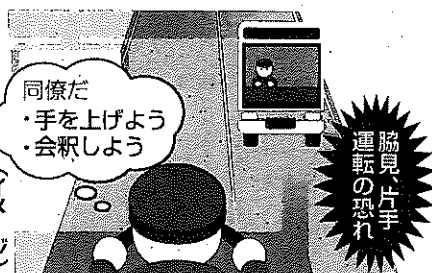
事故の恐れ「指導徹底を」

バス運転手あいさつ 覆面調査結果



※事業用自動車事故調査委員会の報告書に基づく

バス運転手のあいさつイメージ



調査内容は6月公表の報告書に盛り込まれた。報告書によると、事故は21年8月28日夜に発生。西鉄バス北九州の男た

調査委員の聞き取りによると、「普段から顔見知りの運転手に会釈しており、誰かが運転しているか気になった」と述べた。この会社では、あいさつ禁止を明記した「乗務の手引き」を全ての運転手に配布していた。親会社の西日本鉄道は取材に「少なくとも16年以上前からあいさつは厳禁にしている。引き続き指導する」と述べた。

調査委員の聞き取りによると、運転手同士のあいさつを巡っては、東京都板橋区で前不注意の原因となり、歩行者をばねで死亡させる事故が起きたこと、禁止。日本バス協会も12年、もめさせるよう事業者に周知している。調査委員の委員長で大原記念労働科学研究所の酒井一博主任研究員は「運

転の仕事は単純な面があり、刺激を求めてあいさつしているのかもしれない」と推測。「例えば時速40キロは1秒間に11メートル進む。2、3秒でも脇見運転は命取りだ」と注意を呼びかける。長年続く慣習は簡単になくならないのか。交通ライターの杉山淳一さんは「事業者だけでなく、運転免許講習時の指導も必要だ」と話す。鉄道では自動列車停止装置(A.T.S)などの導入でヒューマンエラーによる事故の防止に取り組んできたことに触れ、「教育だけで解決できなければ、障害物検知センサーなど最新の装置を付けることが必要だ」としている。